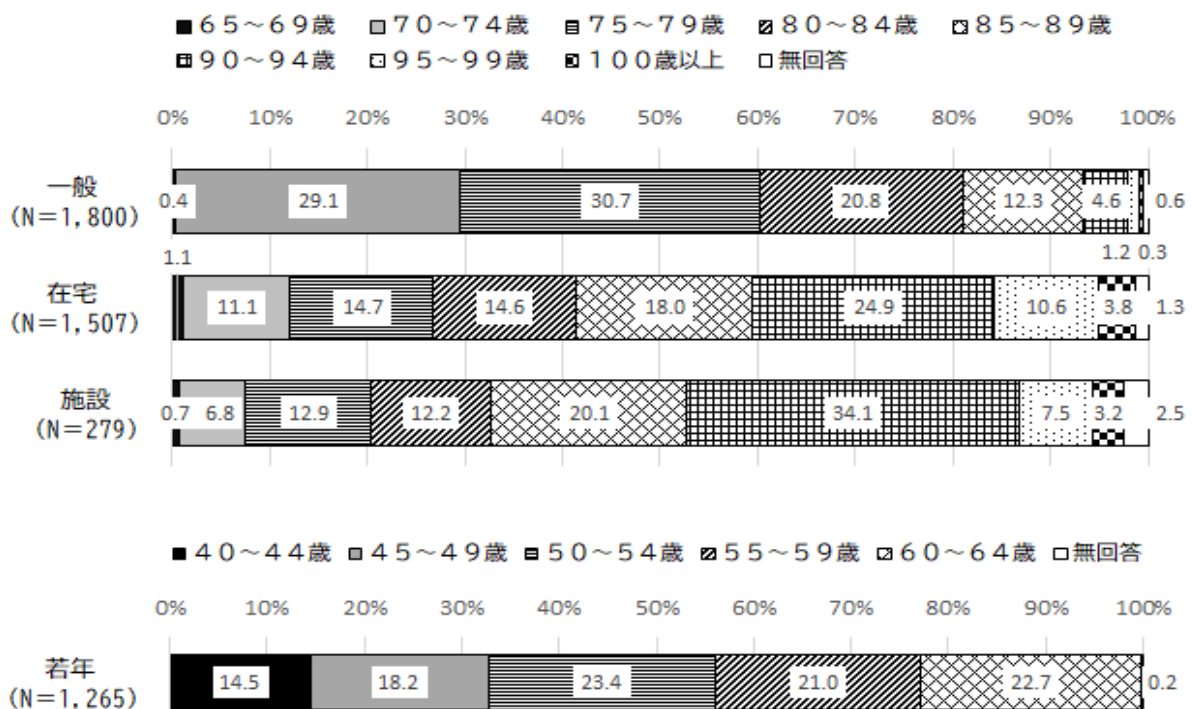


「令和7年度北九州市高齢者等実態調査」の結果報告【概要】

【調査の概要】

- (1) 調査目的 北九州市に在住する高齢者等の保健福祉に関するニーズ、意識及び実態を把握することで今後の高齢社会対策を進めるうえでの基礎資料を得ること目的に調査をおこなったもの。
- (2) 調査対象
- ・一般高齢者 : 市内在住、65歳以上、要支援・要介護認定非該当の方
 - ・在宅高齢者 : 市内在住、65歳以上、要支援・要介護認定を受けている方
 - ・施設入所高齢者 : 市内の介護保険施設に入所している方
 - ・若年者 : 市内在住、40～64歳の方
- ※住民基本台帳及び介護保険データベースより無作為抽出
(調査基準日は令和7年10月1日。但し、「若年者」は令和7年10月29日)
- (3) 調査方法 郵送による配布・回収(無記名)
※若年者(40～64歳)については、インターネットによる回答も活用
- (4) 調査期間 令和7年12月1日～令和7年12月31日
- (5) 調査結果
- ・一般高齢者 : 配布票数 3,000 有効回収票数 1,800 有効回収率 60.0%
 - ・在宅高齢者 : 配布票数 3,600 有効回収票数 1,507 有効回収率 41.8%
 - ・施設入所高齢者 : 配布票数 600 有効回収票数 279 有効回収率 46.5%
 - ・若年者 : 配布票数 3,000 有効回収票数 1,265 有効回収率 42.1%
- ※報告書の中で「一般」とあるのは一般高齢者、「在宅」とあるのは在宅高齢者、「施設」とあるのは施設入所高齢者、「若年」とあるのは若年者をさす。

【回答者の年齢構成】



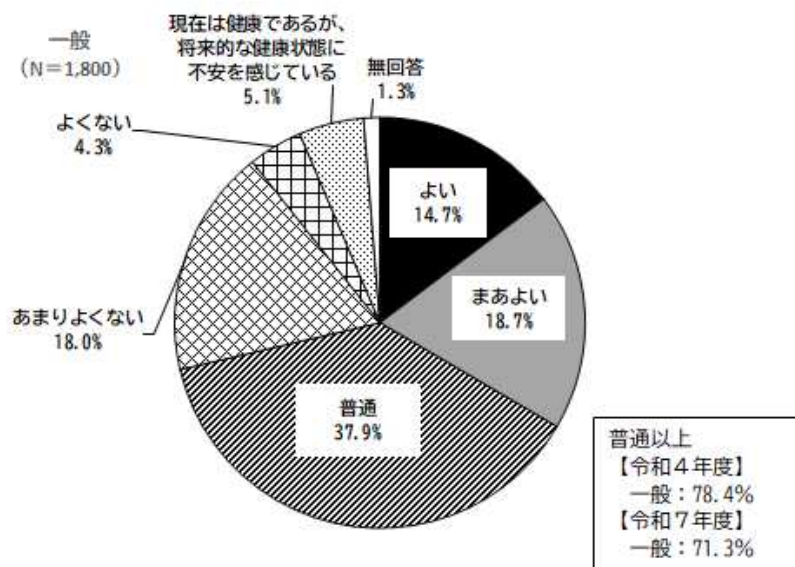
【健康・医療】

(1) 健康状態 (報告書8ページ)

対象：『一般高齢者』

一般高齢者の健康状態については、「普通」が37.9%と最も多く、次いで「まあよい」が18.7%、「あまりよくない」が18.0%となっている。

普通以上（「よい」「まあよい」「普通」の合計）は71.3%となっている。

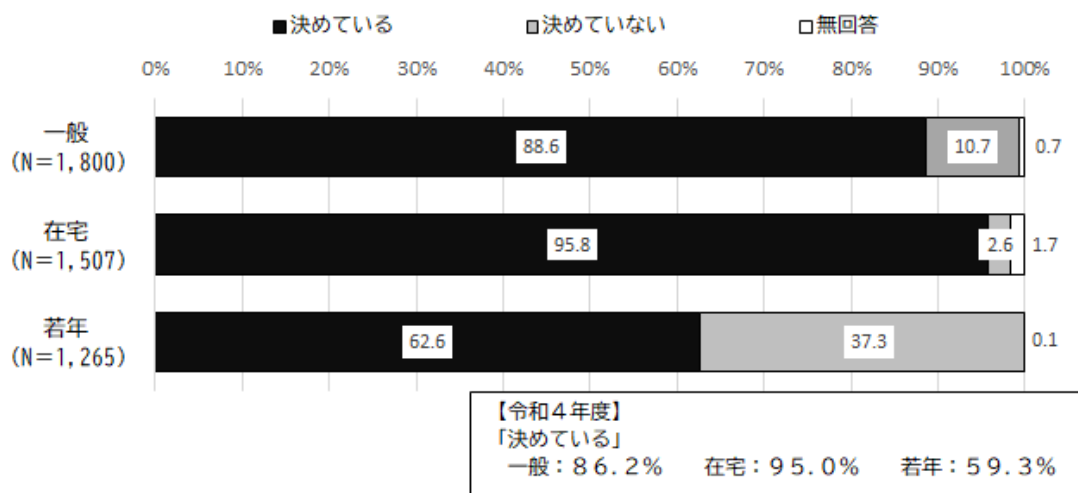


(2) かかりつけ医 (報告書8ページ)

対象：『一般高齢者』『在宅高齢者』『若年者』

かかりつけ医を「決めている」人の割合は、一般高齢者で88.6%、在宅高齢者で95.8%といずれも8割を超えている。

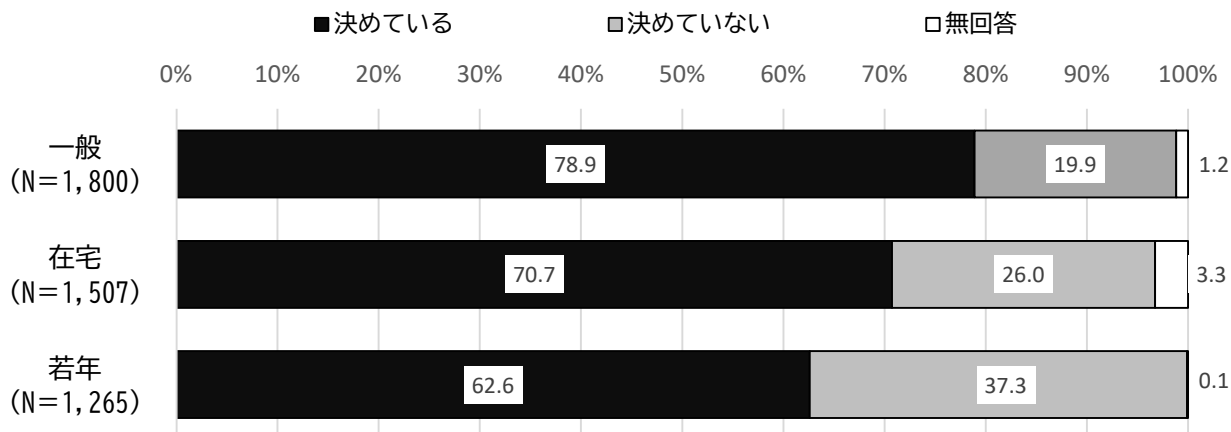
一方、若年者では、「決めている」が62.6%、「決めていない」が37.3%となっている。



(3) かかりつけ歯科医（報告書9ページ）

対象：『一般高齢者』『在宅高齢者』『若年者』

かかりつけ歯科医を「決めている」人は、一般高齢者で78.9%、在宅高齢者で70.7%、若年者で62.6%となっている。

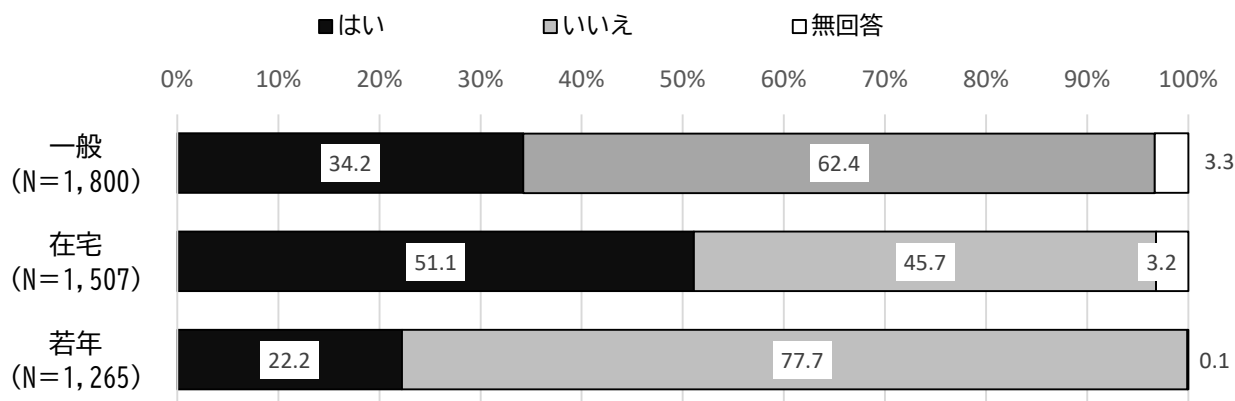


【令和4年度】
「決めている」
一般：77.9% 在宅：73.6% 若年：69.0%

(4) 人生会議（ACP：アドバンス・ケア・プランニング）（報告書10ページ）

対象：『一般高齢者』『在宅高齢者』『若年者』

日頃から信頼できる人と人生会議（ACP）をしている人は、一般高齢者で34.2%、在宅高齢者で51.1%、若年者で22.2%となっている。

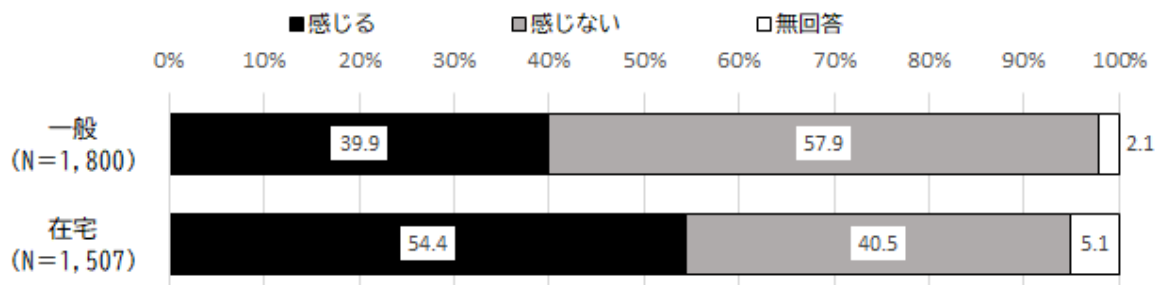


【令和4年度】
「はい」
一般：32.8% 在宅：50.2% 若年：22.9%

(5) 聞こえづらさ (報告書 14 ページ)

対象：『一般高齢者』『在宅高齢者』

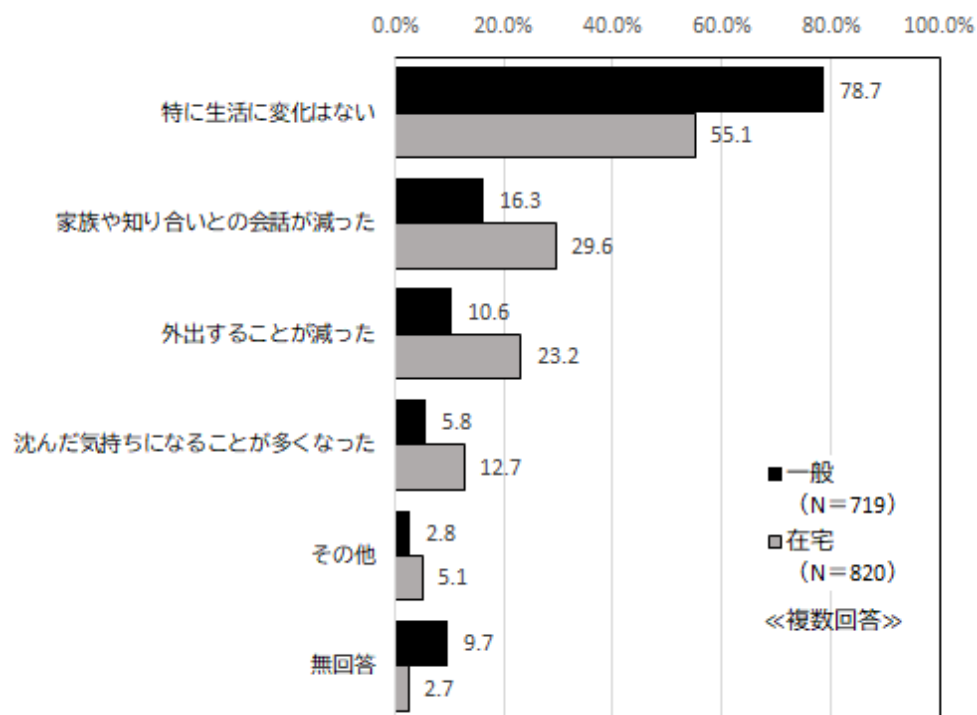
日常生活において、会話やテレビの音が聞こえづらいと感じるか尋ねたところ、「感じる」の割合は一般高齢者で 39.9%、在宅高齢者で 54.4%となっている。



(6) 聞こえづらさによる生活の変化 (報告書 14 ページ)

対象：『一般高齢者』『在宅高齢者』

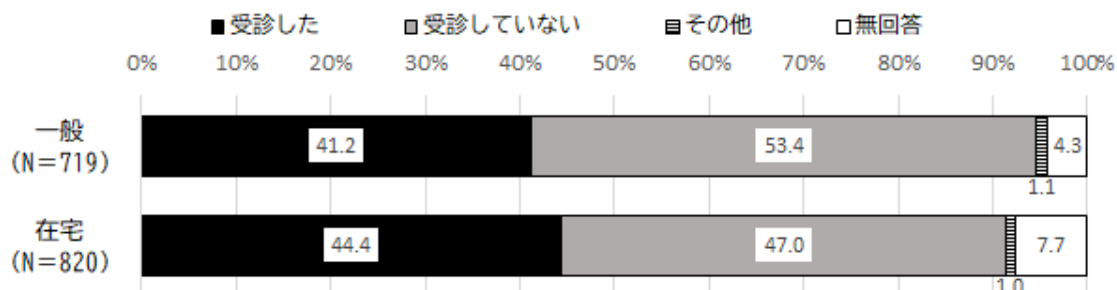
「会話やテレビの音が聞こえづらいと感じる」と回答した人に対し、生活の変化があったか尋ねたところ、「特に生活に変化はない」が最も多く、一般高齢者で 78.7%、在宅高齢者で 55.1%となっている。次いで「家族や知り合いとの会話が減った」が一般高齢者で 16.3%、在宅高齢者で 29.6%、「外出することが減った」が一般高齢者で 10.6%、在宅高齢者で 23.2%となっている。



(7) 病院(耳鼻咽喉科など)受診の有無 (報告書 15 ページ)

対象：『一般高齢者』『在宅高齢者』

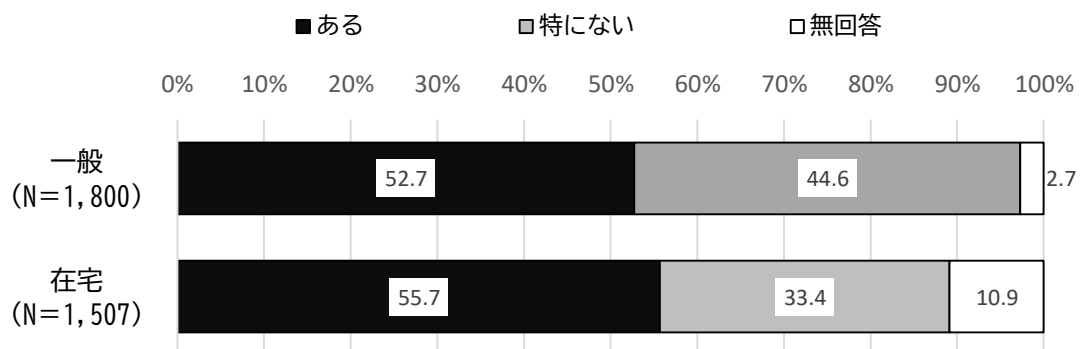
「会話やテレビの音が聞こえづらいと感じる」と回答した人に対し、病院(耳鼻咽喉科など)を受診したことがあるか尋ねたところ、「受診した」の割合は一般高齢者で41.2%、在宅高齢者で44.4%となっている。



(8) 介護予防(フレイル予防)の取り組み状況 (報告書 16 ページ)

対象：『一般高齢者』『在宅高齢者』

健康づくりや介護予防(フレイル予防)のために、日ごろから取り組んでいることがあるかどうか尋ねたところ、「ある」の割合は一般高齢者で52.7%、在宅高齢者で55.7%となっている。



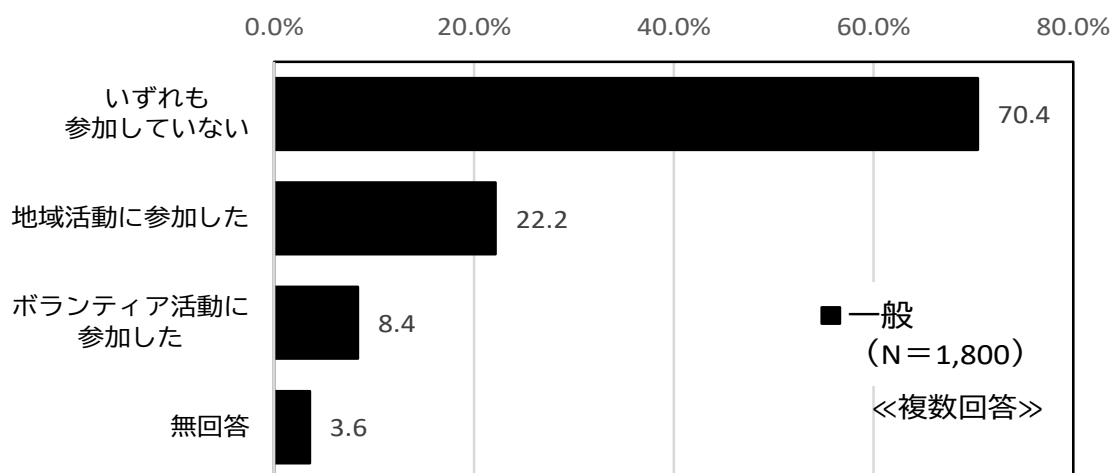
【令和4年度】
「ある」
一般：59.6% 在宅：56.9%

【令和元年度】
「ある」
一般：62.6% 在宅：53.2%

(9) 地域活動の状況 (報告書 19 ページ)

対象：『一般高齢者』

この1年間に、自治会やまちづくり協議会、老人クラブなどの地域活動に参加したかどうかを尋ねたところ、「いずれも参加していない」が70.4%と最も多く、次いで「地域活動に参加した」が22.2%、「ボランティア活動に参加した」が8.4%となっている。



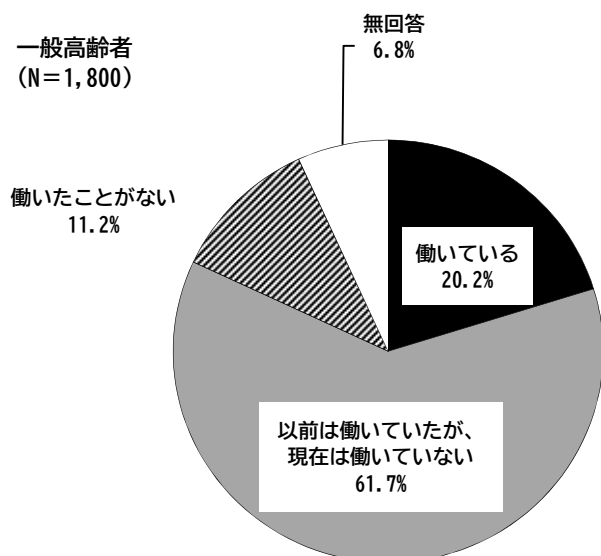
【令和4年度】
 「いずれも参加していない」71.3%
 「地域活動に参加した」20.8%
 「ボランティア活動に参加した」8.8%

【令和元年度】
 「いずれも参加していない」64.0%
 「地域活動に参加した」25.7%
 「ボランティア活動に参加した」10.3%

(10) 就労状況 (報告書 24 ページ)

対象：『一般高齢者』

就労状況については、「以前は働いていたが、現在は働いていない」が61.7%と最も多く、次いで「働いている」が20.2%、「働いたことがない」が11.2%となっている。



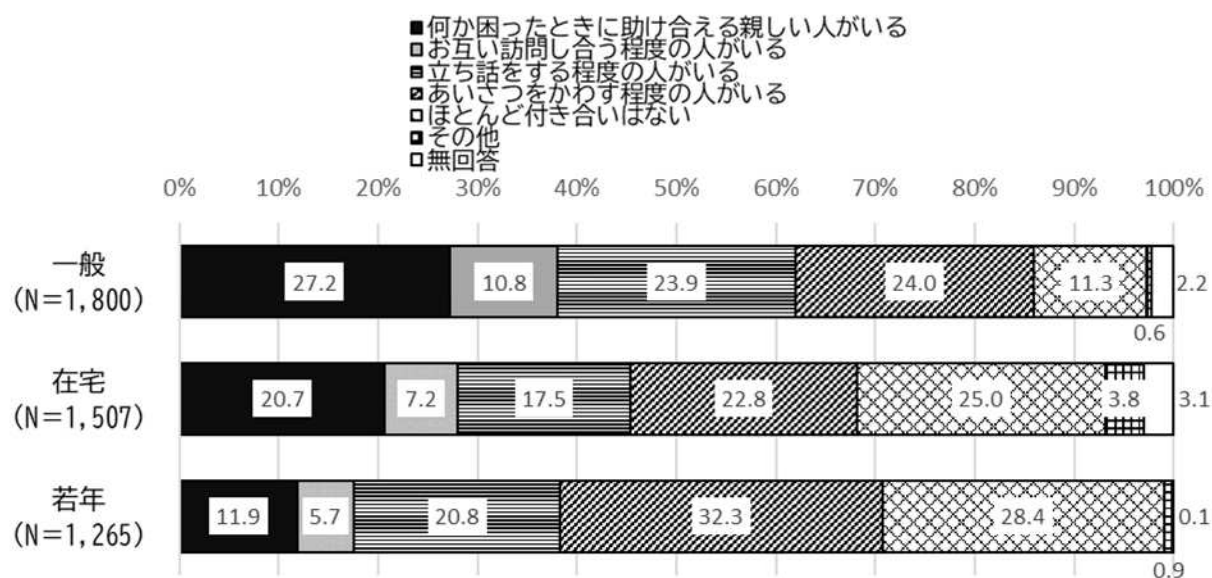
【令和4年度】
 「働いている」20.9%
 「以前は働いていたが、現在は働いていない」64.4%
 「働いたことがない」10.3%

【令和元年度】
 「働いている」29.8%
 「以前は働いていたが、現在は働いていない」57.4%
 「働いたことがない」7.7%

(11) 近所づきあい（報告書 34 ページ）

対象：『一般高齢者』『在宅高齢者』

近所で親しく付き合っている人がいるか尋ねたところ、一般高齢者では「何か困ったときに助け合える親しい人がいる」が 27.2%と最も多く、在宅高齢者では「ほとんど付き合いはない」が 25.0%と最も多く、若年者では「あいさつをかわす程度の人がある」が 32.3%と最も多くなっている。



【令和4年度】		
「何か困ったときに助け合える親しい人がいる」		
一般	22.4%	在宅
17.3%	若年	11.6%
「お互い訪問し合う程度の人がある」		
一般	10.7%	在宅
7.6%	若年	5.1%
「立ち話をする程度の人がある」		
一般	23.6%	在宅
14.8%	若年	22.1%
「あいさつをかわす程度の人がある」		
一般	19.5%	在宅
20.5%	若年	33.4%
「ほとんど付き合いはない」		
一般	12.5%	在宅
23.7%	若年	26.5%

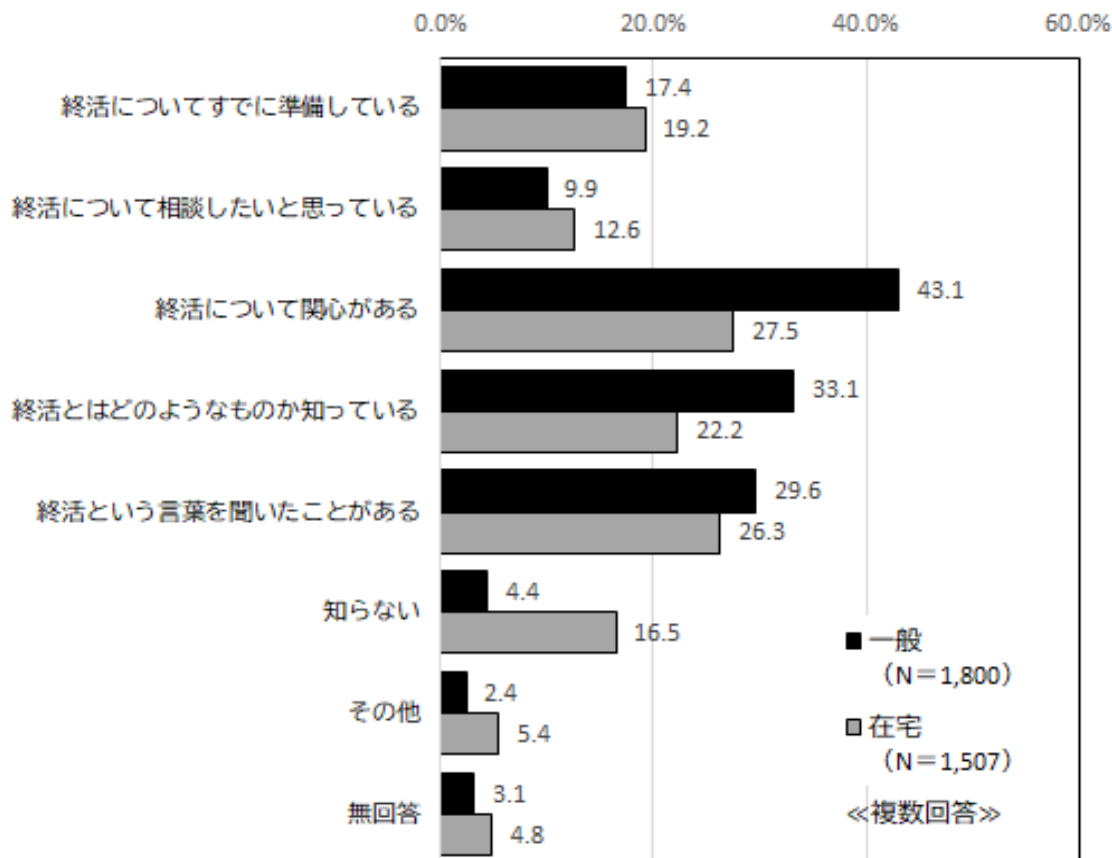
(12) 終活について（報告書 36 ページ）

対象：『一般高齢者』『在宅高齢者』

終活について尋ねたところ、一般高齢者では「終活について関心がある」が 43.1%と最も多く、次いで「終活とはどのようなものか知っている」が 33.1%、「終活という言葉聞いたことがある」が 29.6%となっている。

在宅高齢者では「終活について関心がある」27.5%と最も多く、次いで「終活という言葉聞いたことがある」が 26.3%、「終活とはどのようなものか知っている」が 22.2%となっている。

	一般高齢者	在宅高齢者
1位	終活について関心がある (43.1%)	終活について関心がある (27.5%)
2位	終活とはどのようなものか知っている (33.1%)	終活という言葉聞いたことがある (26.3%)
3位	終活という言葉聞いたことがある (29.6%)	終活とはどのようなものか知っている (22.2%)



【令和4年度】
 一般：42.9%「終活について関心がある」
 39.6%「終活とはどのようなものか知っている」
 29.3%「終活という言葉聞いたことがある」
 在宅：27.3%「終活とはどのようなものか知っている」
 26.4%「終活について関心がある」
 26.3%「終活という言葉聞いたことがある」

(13) 終活の準備にあたっての不安（報告書 38 ページ）

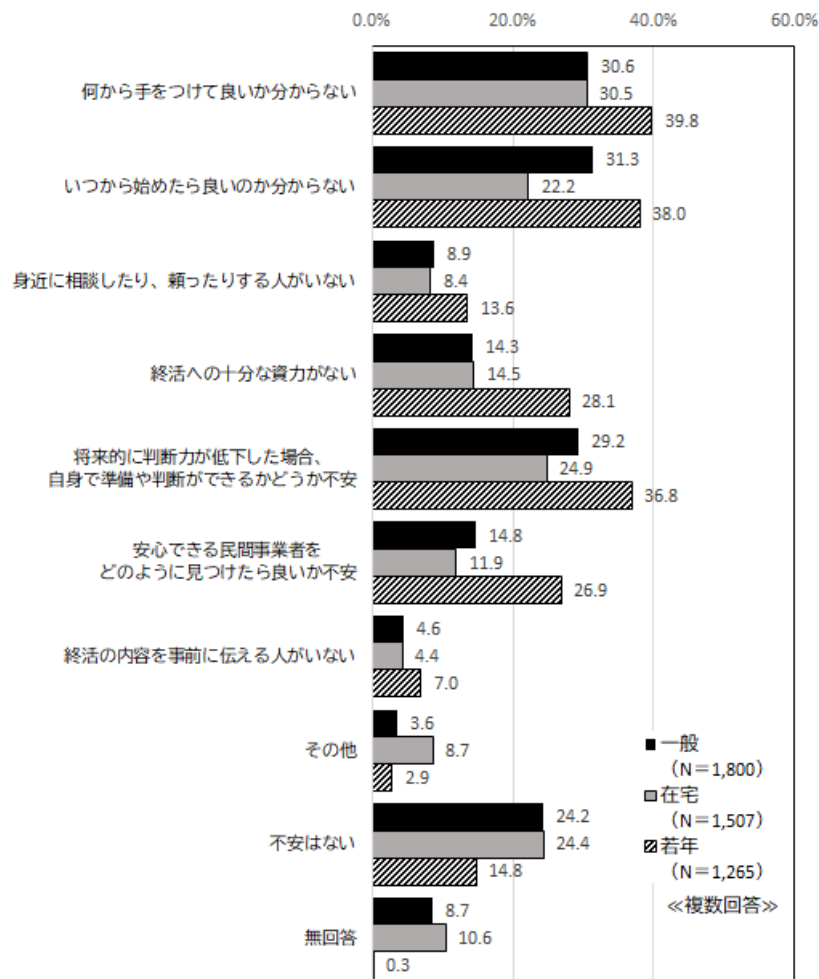
対象：『一般高齢者』『在宅高齢者』『若年者』

終活の準備にあたって、不安に思っていることを尋ねたところ、一般高齢者では「いつから始めたら良いのか分からない」が31.3%で最も多く、次いで「何から手をつけて良いか分からない」が30.6%、「将来的に判断力が低下した場合、自身で準備や判断ができるかどうか不安」が29.2%となっている。

在宅高齢者では「何から手をつけて良いか分からない」が30.5%で最も多く、次いで「将来的に判断力が低下した場合、自身で準備や判断ができるかどうか不安」が24.9%、「不安はない」が24.4%となっている。

若年者では「何から手をつけて良いか分からない」が39.8%で最も多く、次いで「いつから始めたら良いのか分からない」が38.0%、「将来的に判断力が低下した場合、自身で準備や判断ができるかどうか不安」が36.8%となっている。

	一般高齢者	在宅高齢者	若年者
1位	いつから始めたら良いのか分からない (31.3%)	何から手をつけて良いか分からない (30.5%)	何から手をつけて良いか分からない (39.8%)
2位	何から手をつけて良いか分からない (30.6%)	将来的に判断力が低下した場合、 自身で準備や判断ができるかどうか不安 (24.9%)	いつから始めたら良いのか分からない (38.0%)
3位	将来的に判断力が低下した場合、 自身で準備や判断ができるかどうか不安 (29.2%)	不安はない (24.4%)	将来的に判断力が低下した場合、 自身で準備や判断ができるかどうか不安 (36.8%)



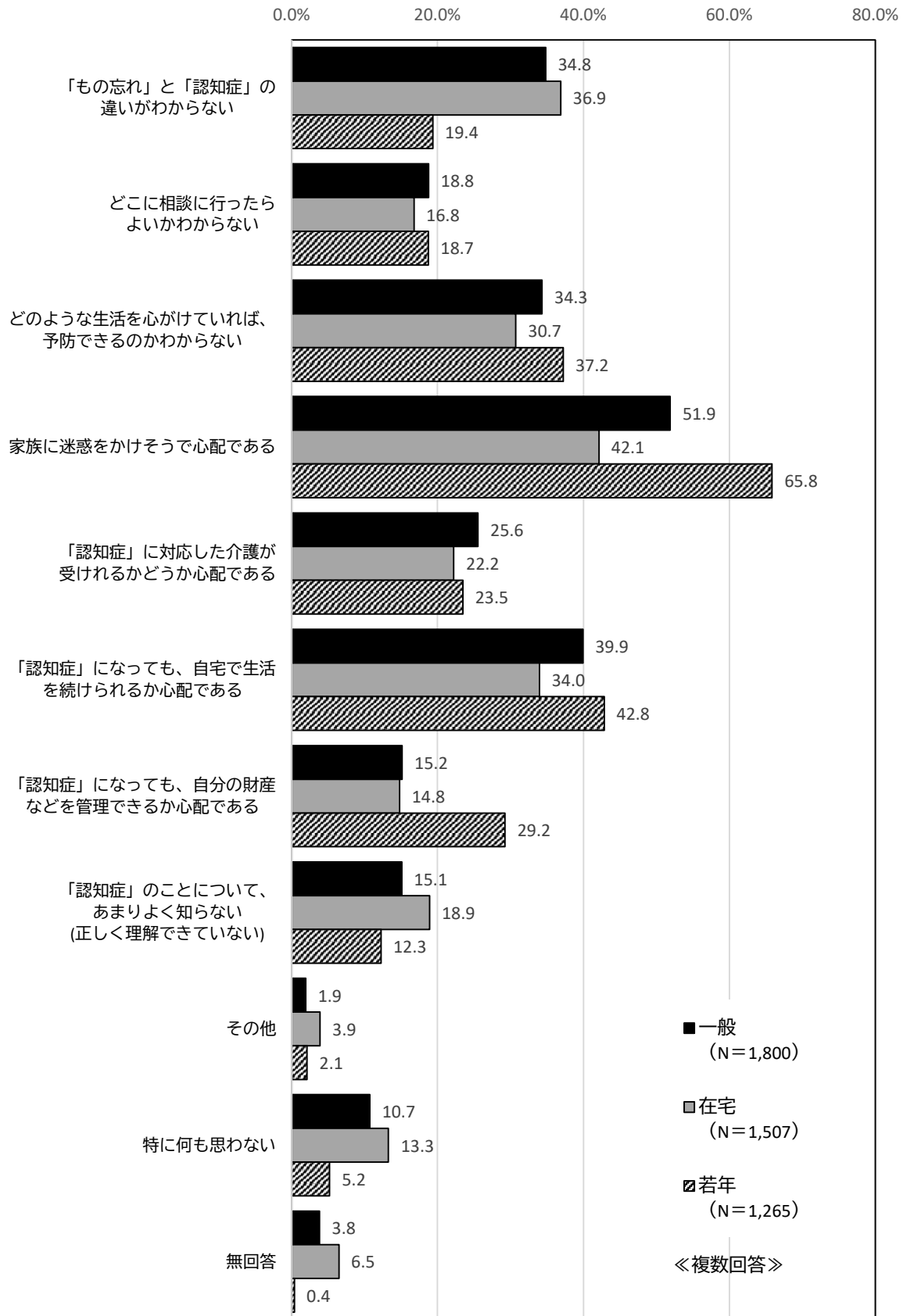
(14) 認知症と聞いて最初に思うこと（報告書 42 ページ）

対象：『一般高齢者』『在宅高齢者』『若年者』

認知症と聞いて、最初に思うことはどのようなことか尋ねたところ、「家族に迷惑をかけそうで心配である」が最も多く、一般高齢者で 51.9%、在宅高齢者で 42.1%、若年者で 65.8%となっている。次いで一般高齢者、若年者は「『認知症』になっても、自宅で生活を続けられるか心配である」、在宅高齢者は「『もの忘れ』と『認知症』の違いがわからない」が多くなっている。

	一般高齢者	在宅高齢者	若年者
1位	家族に迷惑をかけそうで心配である (51.9%)	家族に迷惑をかけそうで心配である (42.1%)	家族に迷惑をかけそうで心配である (65.8%)
2位	「認知症」になっても、自宅で生活を続けられるか心配である (39.9%)	「もの忘れ」と「認知症」の違いがわからない (36.9%)	「認知症」になっても、自宅で生活を続けられるか心配である (42.8%)
3位	「もの忘れ」と「認知症」の違いがわからない (34.8%)	「認知症」になっても、自宅で生活を続けられるか心配である (34.0%)	どのような生活を心がけていれば、予防できるのかわからない (37.2%)

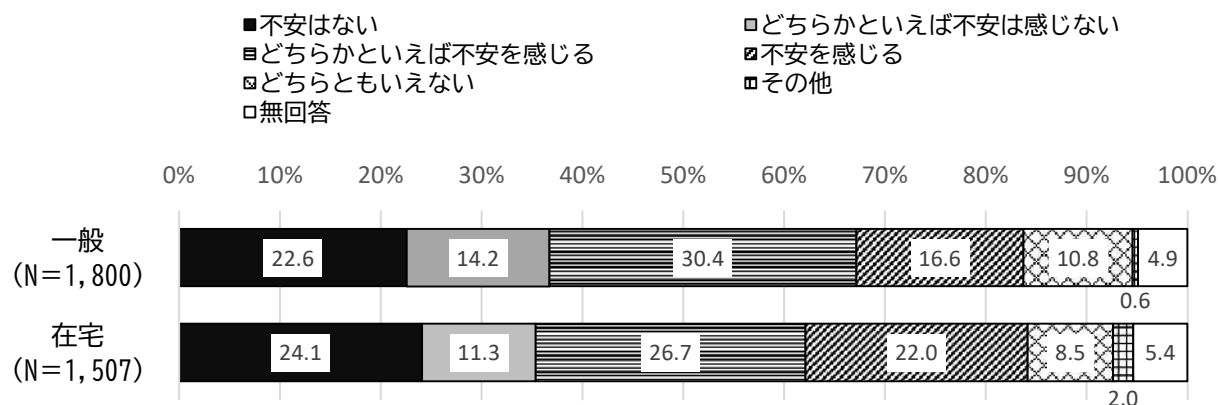
<p>【令和4年度】</p> <p>一般：53.9%「家族に迷惑をかけそうで心配である」 42.2%「「認知症」になっても、自宅で生活を続けられるか心配である」 31.6%「どのような生活を心がけていれば、予防できるのかわからない」</p> <p>在宅：45.9%「家族に迷惑をかけそうで心配である」 35.0%「「認知症」になっても、自宅で生活を続けられるか心配である」 34.1%「「もの忘れ」と「認知症」の違いがわからない」</p> <p>若年：70.3%「家族に迷惑をかけそうで心配である」 43.9%「「認知症」になっても、自宅で生活を続けられるか心配である」 38.2%「どのような生活を心がけていれば、予防できるのかわからない」</p>



(15) 高齢者の権利侵害に対する不安（報告書 48 ページ）

対象：『一般高齢者』『在宅高齢者』

虐待や財産をねらった詐欺など高齢者の権利を侵害するものに対する不安があるか尋ねたところ、「どちらかといえば不安を感じる」が最も多く、一般高齢者で 30.4%、在宅高齢者で 26.7%となっている。次いで「不安はない」が一般高齢者で 22.6%、在宅高齢者で 24.1%となっている。



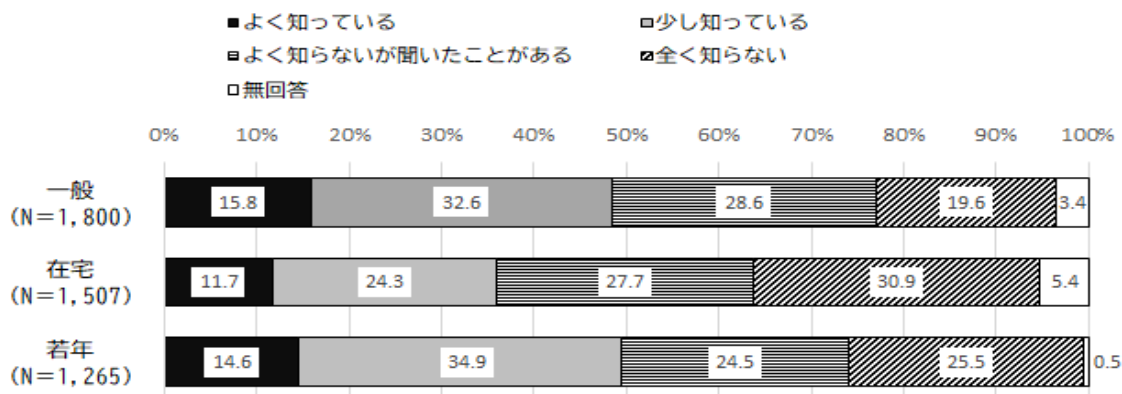
「不安はない」+「どちらかといえば不安は感じない」の合計
 【令和4年度】一般：40.9% 在宅：37.4%
 【令和7年度】一般：36.8% 在宅：35.4%

(16) 成年後見制度の認知度（報告書 48 ページ）

対象：『一般高齢者』『在宅高齢者』『若年者』

成年後見制度を知っているか尋ねたところ、一般高齢者と若年者では「少し知っている」が最も多く、一般高齢者で 32.6%、若年者で 34.9%となっている。

在宅高齢者では、「全く知らない」が 30.9%と最も多くなっている。

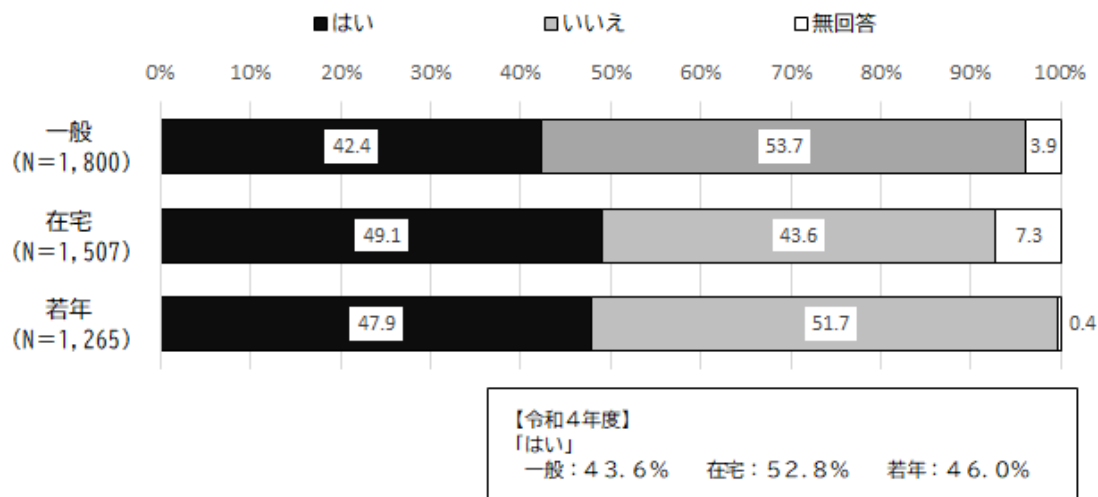


「よく知っている」+「少し知っている」の合計
 【令和4年度】一般：47.9% 在宅：35.8%
 【令和7年度】一般：48.4% 在宅：36.0%

(17) 地域包括支援センターの認知度 (報告書 52 ページ)

対象：『一般高齢者』『在宅高齢者』『若年者』

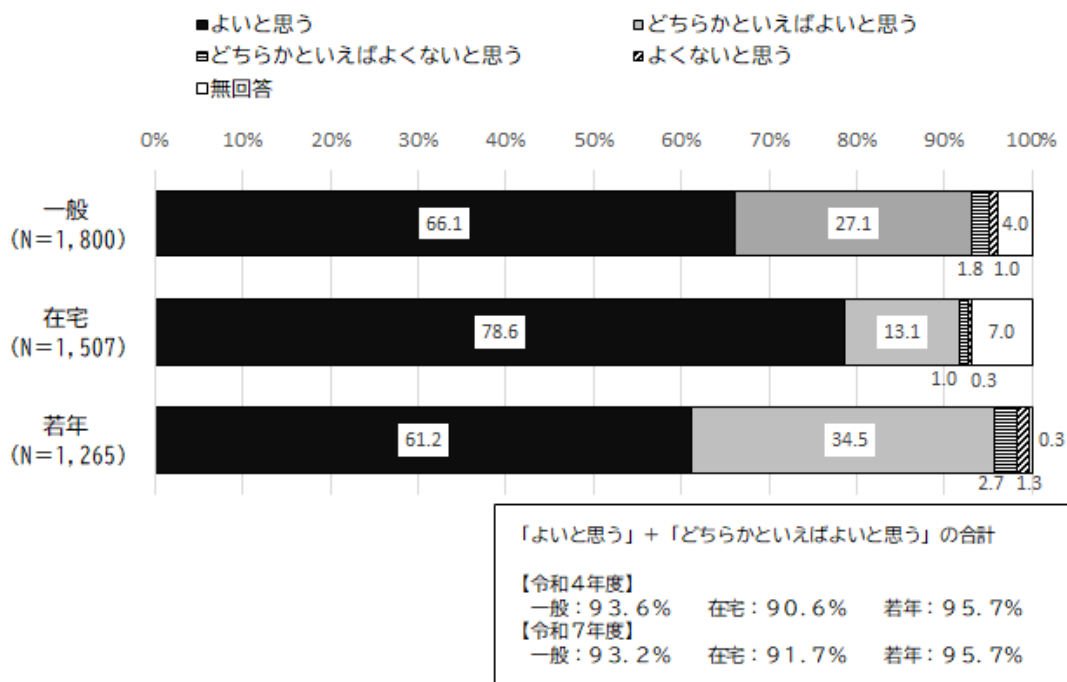
「地域包括支援センター」を知っているか尋ねたところ、「はい」と回答した割合は、一般高齢者で42.4%、在宅高齢者で49.1%、若年者で47.9%となっている。



(18) 介護保険制度に対する考え (報告書 55 ページ)

対象：『一般』『在宅高齢者』『若年者』

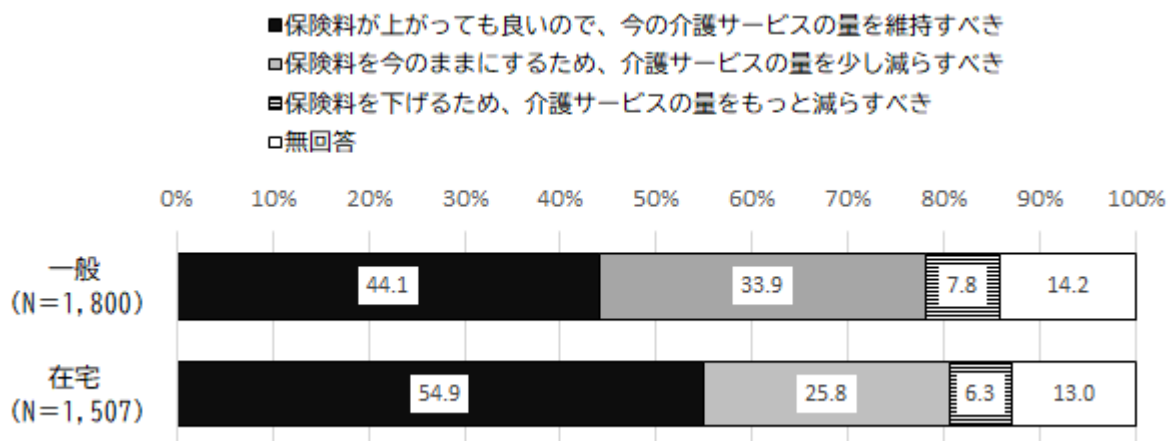
介護保険についてどのように考えるか尋ねたところ、「よいと思う」は一般高齢者が66.1%、在宅高齢者が78.6%、若年者が61.2%で最も多く、「どちらかといえばよいと思う」と回答した人と合わせると、一般高齢者で93.2%、在宅高齢者で91.7%、若年者で95.7%といずれも9割を超えている。



(19) 介護保険の負担に対する考え方 (報告書 61 ページ)

対象：『一般高齢者』『在宅高齢者』

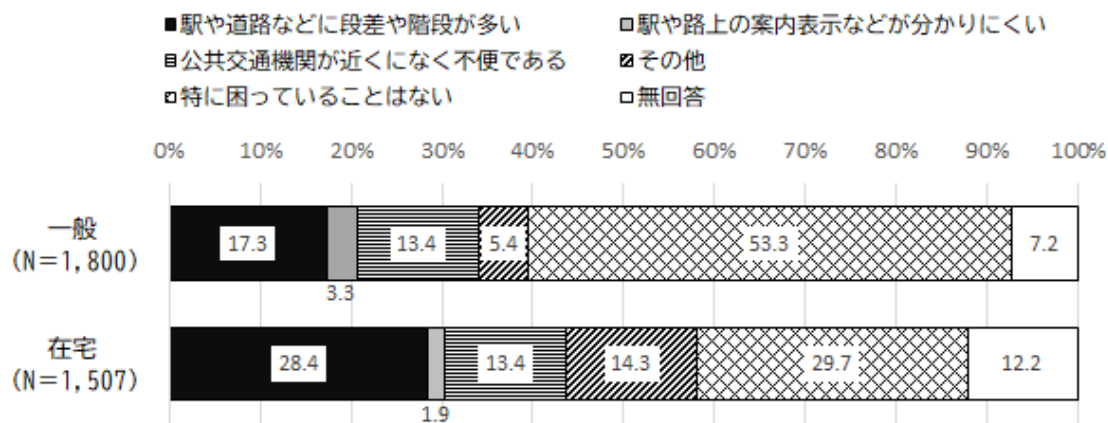
介護保険サービスと介護保険料の関係についての考えを尋ねたところ、「保険料が上がっても良いので、今の介護サービスの量を維持すべき」が最も多く、一般高齢者で 44.1%、在宅高齢者で 54.9%となっている。次いで「保険料を今のままにするために、介護サービスの量を少し減らすべき」が一般高齢者で 33.9%、在宅高齢者で 25.8%となっている。



(20) 外出・移動時の問題点 (報告書 63 ページ)

対象：『一般高齢者』『在宅高齢者』

外出や移動のときに最も困っていることは何か尋ねたところ、「特に困っていることはない」が最も多く、一般高齢者で 53.3%、在宅高齢者で 29.7%となっている。次いで「駅や道路などに段差や階段が多い」が一般高齢者で 17.3%、在宅高齢者で 28.4%となっている。

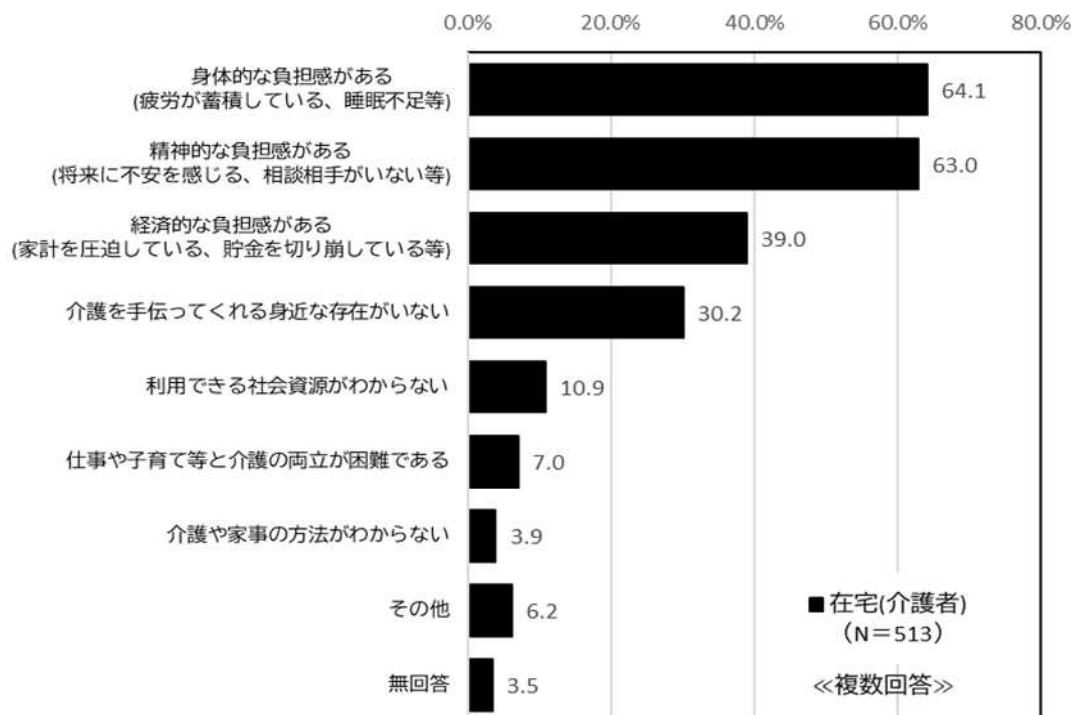


【令和4年度】
「特に困っていることはない」
一般：52.8% 在宅：31.5%

(21) 介護するうえで困っている内容（報告書 80 ページ）

対象：『在宅高齢者（介護者）』

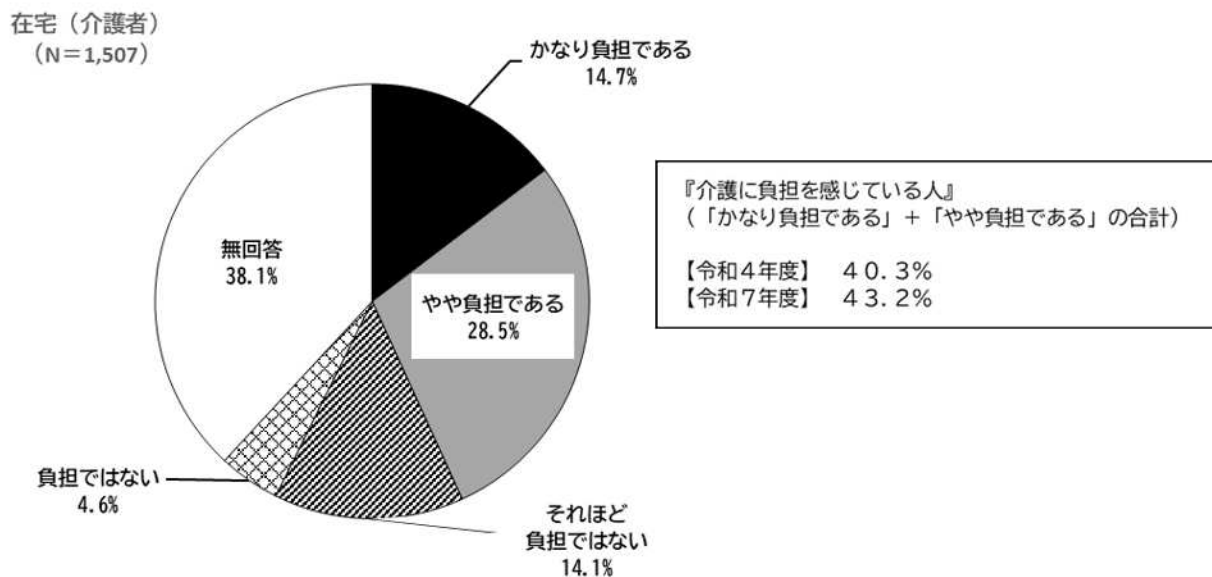
「困っていることがある」と回答した介護者に対し、困っていることは何か尋ねたところ、「身体的な負担感がある（疲労が蓄積している、睡眠不足等）」が 64.1%と最も多く、次いで「精神的な負担感がある（将来に不安を感じる、相談相手がいない等）」が 63.0%、「経済的な負担感がある（家計を圧迫している、貯金を切り崩している等）」が 39.0%となっている。



(22) 介護の負担感（報告書 84 ページ）

対象：『在宅高齢者（介護者）』

介護者が感じている介護の負担感については、「かなり負担である」が 14.7%、「やや負担である」が 28.5%で、介護に負担を感じている人は 43.2%となっている。一方で、「それほど負担ではない」が 14.1%、「負担ではない」が 4.6%となっている。



(23) 北九州市が力を入れていくべき施策（報告書 68 ページ）

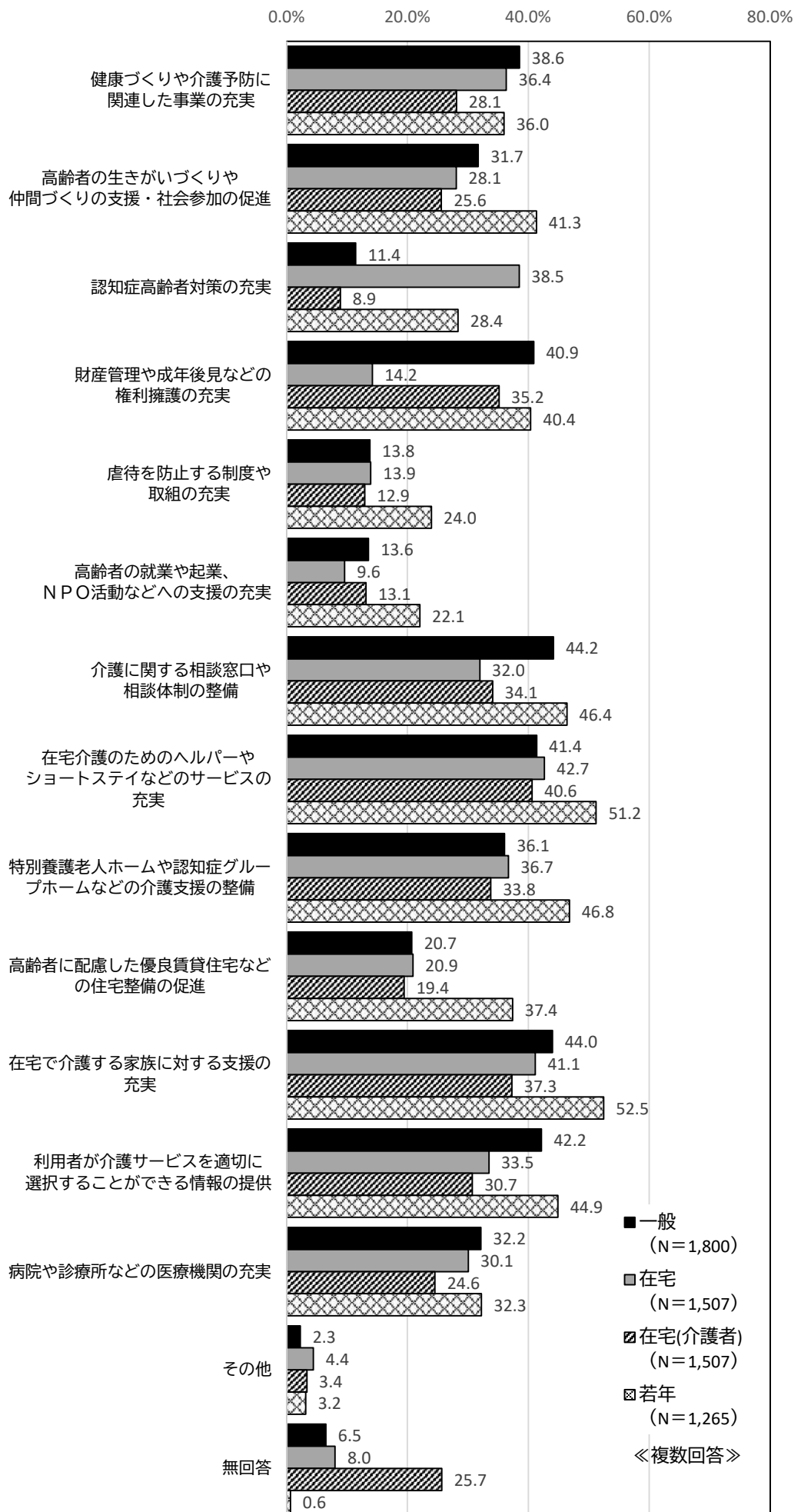
対象：『一般高齢者』『在宅高齢者（介護者）』『若年者』

どのような施策に力を入れていくべきか尋ねたところ、「介護に関する相談窓口や相談体制の整備」、「在宅介護のためのヘルパーやショートステイなどのサービスの充実」、「在宅で介護する家族に対する支援の充実」など幅広い施策に多くの回答があった。

	一般高齢者	在宅高齢者	在宅高齢者（介護者）	若年者
1位	介護に関する相談窓口や相談体制の整備（44.2%）	在宅介護のためのヘルパーやショートステイなどのサービスの充実（42.7%）	在宅介護のためのヘルパーやショートステイなどのサービスの充実（40.6%）	在宅で介護する家族に対する支援の充実（52.5%）
2位	在宅で介護する家族に対する支援の充実（44.0%）	在宅で介護する家族に対する支援の充実（41.1%）	在宅で介護する家族に対する支援の充実（37.3%）	在宅介護のためのヘルパーやショートステイなどのサービスの充実（51.2%）
3位	利用者が介護サービスを適切に選択することができる情報の提供（42.2%）	認知症高齢者対策の充実（38.5%）	財産管理や成年後見などの権利擁護の充実（35.2%）	特別養護老人ホームや認知症グループホームなどの介護支援の整備（46.8%）

【令和4年度】

	一般高齢者	在宅高齢者	在宅高齢者（介護者）	若年者
1位	介護に関する相談窓口や相談体制の整備（46.0%）	在宅で介護する家族に対する支援の充実（43.6%）	在宅で介護する家族に対する支援の充実（34.4%）	在宅で介護する家族に対する支援の充実（56.0%）
2位	在宅で介護する家族に対する支援の充実（45.8%）	在宅介護のためのヘルパーやショートステイなどのサービスの充実（42.5%）	在宅介護のためのヘルパーやショートステイなどのサービスの充実（34.2%）	特別養護老人ホームや認知症グループホームなどの介護支援の整備（54.0%）
3位	在宅介護のためのヘルパーやショートステイなどのサービスの充実（44.4%）	高齢者の就職や起業、NPO活動などへの支援の充実（41.8%）	介護に関する相談窓口や相談体制の整備（32.9%）	在宅介護のためのヘルパーやショートステイなどのサービスの充実（52.7%）



【調査結果のまとめ】

《人生会議（ACP）について》

「日頃から信頼できる人と人生会議（ACP）をしている人」は増加傾向にあることから、引き続き、広報物や市民向けのイベントなどを通じ、普及啓発を着実に進めていく。

《聞こえについて》

聞こえについて、「聞こえづらさ」を感じていても、受診した人は約4割となっている。難聴への理解促進と、早期発見・早期受診に向けた取組が必要である。

《介護予防（フレイル予防）について》

「健康づくりや介護予防（フレイル予防）に日ごろから取り組んでいる人の割合」が前回（R4年度）調査より減少している。今後も地域で主体的・継続的に取り組める介護予防の仕組みづくりを推進する必要がある。

《終活について》

「終活について関心がある」と回答した人が前回（R4年度）より増えている。また、終活の準備にあたり、さまざまな面で不安に思っている方が多いことから、昨年11月に開設した「終活あんしんセンター」をより一層PRし、活用していく取組が必要である。

《認知症について》

「認知症と聞いて、家族に迷惑をかけそうで心配である人の割合」及び「認知症になっても自宅で生活を続けられるか心配である人の割合」は、ともに前回（R4年度）調査より減少している。引き続き、認知症の人を含めた国民一人一人が共生する活力ある社会の実現に向け、認知症施策の充実に取り組む必要がある。

《総括》

今回の調査結果を踏まえ、社会参加促進、認知症支援・介護予防、終活の支援など、多角的な施策を通じて、高齢者が健康で、自分らしく安心して、人生100年時代を幸福に暮らすことができるまちづくりの実現に向けて取り組むことが必要である。